〈原著論文〉

教職課程の学生に求められるソーシャルスキル

原田恵理子　　渡辺弥生
（東京情報大学）　　（法政大学）

Social skills necessary for students in the teacher–training course

キーワード：ソーシャルスキル、教職課程、教師
KEY WORDS：Social　skills,　Teacher–training,　teachers

抄録

本研究は、小学校・中学校・高等学校の教員が教職課程の学生に求める社会性・対人関係能力において 3 点を明らかにした。

（1）学生は大学で社会性や対人関係能力を養成する必要があるか，（2）学生に、どのような社会性や対人関係能力を身に付けてほしいとのか，（3）ソーシャルスキルトレーニングを学ぶ必要があるか。また、どのようなスキルを身につけて欲しいか。小学校、中学校、高校の教員 1,145 名に質問紙調査を行った。テキストマインドで分析した結果、教職課程の学生は社会性と対人関係能力を学ぶ必要性があるとした。小中高の教員は、SST を学ぶ必要があるとした。そして、「相手の気持ちを考えて接する」「話を聴く」のスキルは学習する必要があることが分かった。これらの結果を踏まえて、教職課程の教育の方向性が議論された。

The purpose of the study was to clarify three questions regarding social skills that are necessary for students in the teacher–training course. First of all, is it necessary to learn social skills in the teacher–training course? Secondly, what kinds of social skills do they need for students? Finally, is social skills training (SST) effective to teach students social skills in the teacher–training course? A survey was given to 1,145 teachers working for the elementary, junior high, or high schools. Text mining results showed that teachers from all kinds of schools thought students should learn social skills such as “Empathic skills”, “Listening skills”,and “Assertive skills.” Especially, teachers desired to introduce Social skills training into the teacher-training course. Based on these results, the directions of education for teacher–training course were discussed.

1．問題・目的

平成18年の文部科学省の答申にある「今後の教員養成・免許制度の在り方について」では、これからの社会と教員に求められる資質が明示された。グローバル化、情報化、少子化といった社会構造が変化する時代に対して、教員は専門的知識や指導技術を不断の努力によって身に付けていくことが重視されるようになった。その中で、教員に求められる資質能力として、「教師の仕事に対する使命感や誇り、教育的愛情や責任といった教職に対する強い情熱」「子ども理解や専門的知識や教養といった実践的指導力」「豊かな人間性や社会性、対人関係能力やコミュニケーション能力同僚性」といった総合的な人間力という要素が明記されている。このような教師として必要な資質能力を確実に身に付けさせるために、教職課程の養成においては、最終的な形成と確認のために「教職実践演習」という科目が新設・必修化されることとなった。この科目では、「使命感や責任感、教育的愛情等」「社会性や対人関係能力」「幼児児童生徒理解や学級経営等」「教科・保育内容等の指導力」に関する4つの事項を含めることが適当であるとされている。

こうした流れを受けて、教職課程の学びの集大成としての教職実践演習では、どのような教育が求められているかといったことを提案するような実践報告が見られるようになってきている。たとえば、全15回の授業形式の開発や工夫の効果（五十嵐・土橋，2015）といったように授業全体の在り方を検討する報告がある。それ以外にも、現職教員や教員経験者との積極的な交流（菊永・塚元，2011）、学級経営力や授業実践力を体得させるインターンシップ（友田・山内，2008）、高校見学といった地域リソースの活用（梅津，2011）、各教科あるいは校種別による教職実践演習の取組（三村・山内・中村・大後戸・網本・木下・佐藤・間瀬・枝川・森田，2015）、履修カルテの開発（岩本・矢作・髙嶋，2011）、ICT教材作成および教材の活用方法を考えるICT教材作成演習（赤澤・金子・佐々木・中山，2014）等、多様な視点からの研究が挙げられている。

このように、各大学の特性や実態に応じた教員養成の状況から、カリキュラム作成や実践の在り方を提案している報告が多いものの、現場の教師が求めている「教員」に焦点をあてた視点からの養成については議論されていることは少なかった。なかでも「社会性や対人関係能力」は、グローバル化が進むなか、多様な価値観や意見および考え等をもつ他者を受容し、協働で問題解決をしていく人間関係形成能力・コミュニケーション能力を各教科等における言語活動を通して児童生徒に身に付けさせることが求められている（文部科学省，2011）。これはまさに、その力を育成する中心的担い手である教師自身も社会性や対人関係能力を向上させていくことが求められていることは自明のことである。つまり、児童生徒とのコミュニケーションや授業での能力だけでなく、同僚との関係、保護者や地域社会との連携においても、こうした対人関係能力は非常に重要になりつつある。

この点については、さまざまな研究で明らかにされている。教職課程の学生が考える理想の教師に求められる能力や態度等としては「子供とのコミュニケーション力」が最も重要であると明らかにされている（山根・古市・木多，2013）。田宮・下野（2008）では、初任者教員を対象とし教職実践演習を振り返らせたところ、教科の指導力以外に、「社会人としての基本的な態度」や「組織の一員としての自覚の重要性」といった同僚性としてのコミュニケーションが重要な資質能力として取り上げられていた。また、教師にとって基礎的な能力であることを示唆している。武田・村瀬・

八木・宮木・嶋﨑（2013）は、初任者研修の教員対象にカリキュラム開発のためのニーズ調査を行い、「地域連携へのニーズの低さ」に対する意識の低さを指摘し、教職実践演習において積極的に取り上げていく必要性を強調している。これらからも、様々な視点からコミュニケーションの重要性は指摘されている。ただし、意外なことに初任者研修にばかり焦点が当てられており、経験年数の豊かな教員が教職課程におけるコミュニケーション能力の養成についてどのような考えやニーズを持っているかは明らかにされていない。本来ならば、学校の風土や雰囲気を明るいものとし、しっかりとした連携が必要だという意識は、初任者というよりはむしろ経験豊かな教員が常々考えているところではないかと推察される。したがって、これまでその点が明確に検討されていなかったのは意外である。初心者研修だけではなく、経験豊かなベテラン教員の視点をも含めた、教員養成におけるコミュニケーション能力の育成を検討していくことが必要であろう。

そこで本研究では、小学校・中学校・高等学校に勤務する教員に対して、「教員になるために身につけて欲しい教職課程学生の社会性や対人関係能力」について調査を行い、次の3点を明らかにする。

（1）教員を目指す教職課程の学生が、大学で社会性や対人関係能力を養成する必要があるかどうかについてどのような認識をもっているのか，（2）教員を目指す学生に、どのような「社会性や対人関係能力（コミュニケーション力）」を身に付けてほしいと考えているのか，（3）社会性や対人関係能力を育む心理教育プログラムの一つであるソーシャルスキルトレーニング（以下、SST）を実施する必要があるのか、また、具体的にどのようなスキルを身につけて欲しいと考えているのか。これらの点を踏まえたうえで、今後の教職課程の学生に対する対人関係能力の育成について考察する。

2．方法

調査対象者

参加者は、関東にある公立の小学校・中学校、高等学校に勤めている教員 1,145 名（小学校 543 名、中学校 319 名、高等学校 283 名）を対象として行った。教員歴の平均は、17.45 年であった。

調査時期

調査は 2014 年 4 月から 2015 年 3 月にかけて実施した。

手続き

無記名による質問紙調査が実施された。質問紙は、教育委員会から校長を通じて各教師に配布され、学校ごとに回収された。倫理的配慮として、調査への協力は任意とし、回答したくない場合は回答しなくてもよいことや、全ての回答は統計的に処理され個人が特定されることはないことを質問紙に明記した。

調査内容

（1）「教員養成において社会性や対人関係能力を養成する必要性」に関して、教職課程の学生の社会性や対人関係能力を大学で養成する必要があると思うかについて「1 ある」「2 どちらともいえない」「3 ない」といった 3 件法で回答させ、その理由も記述させた。

（2）「教員が望む社会性や対人関係力の養成」について自由記述で回答させた。

（3）教職課程の学生に対して心理教育である SST を実施することについて、「まったく必要ない＝ 1」

「あまり必要でない＝2」「少し必要である＝3」「かなり必要である＝4」「非常に必要である＝5」といった5件法と、選択した理由を自由記述で回答させた。

（4）学生に身につけて欲しいスキルについて、原田（2012）、渡辺・小林（2009）を参考に20のスキルからあてはまるものすべてを選択させた。

3．結果

1）調査実施校及び回答者の概要

調査の結果、欠損値を除く1,002名から回答を得られた（回答率88%）。回答者の内訳は、小学校490名、中学校279名、高等学校233名、性別で見ると、男性が460名(46%)、女性が542名(54%)であった。さらに、勤務年数は、1～5年の初任期前期が284名（28%）、5～10年の初任期後期が145名（14.5%）、10～20年の中堅期が104名（10.4%）、20年以上の管理職期が469名（46.8%）であった。

2）教職課程における社会性や対人関係能力の育成の必要性

まず、どれくらいの教員が教職課程の学生に社会性や対人関係能力の育成の必要性を感じているのだろうか。必要であると答えた教員は737名(73.6%)、「どちらともいえない」が225名(22.5%)、「必要なし」は40名（4%）となった。学校別では、全ての校種において必要性があると回答した教員が6割以上であった（表1）。学校種によって相違がみられるかを検討するためにχ^2検定を行ったところ有意差が認められ（χ^2（4，N＝1,002）＝.001，p<.05）、学校種によって教職課程の学生に社会性や対人関係能力の育成の必要性は異なることが明らかとなった。そこで、調整済み残差を行った結果、高校の教員による社会性や対人関係能力の必要性は「どちらともいえない」「必要なし」の回答が多く、「必要である」の回答が少ない結果となった（表2）。つまり、高校の教員よりも、小学校・中学校の教員の方が、教職課程における社会性や対人関係能力について「必要あり」の傾向にあることがわかった。

次に、必要性の有無の理由について無回答を除く890名を対象にテキストマイニングによる分析を行った。回答者の約3%（30名）以上が回答しているキーワードを抽出した結果、教職課程の学生の社会性や対人関係能力を大学で養成することについて「必要あり」は24件、「どちらともいえない」は24件、「必要なし」は17件であった。図1には、特徴語の分析結果を示した。図1より、上位3件は、「必要あり」が「重要・必要・大切・役立つ」、「生徒・子供・学生・大学生」、「教師・教員」、「どちらともいえない」と「必要なし」は「思う」「養成する・学ぶ」「大学・学校」であった。「必要あり」では、重要・大切といった認識、生徒・教師・学生といった社会性や対人関係能と連関するキーワードが挙がり、社会性や対人関係能力の育成への関心の高さが推測された。さらに、「必要あり」のキーワード同士の関係をみるためにコレスポンデンス分析を行った。各キーワード間の関係の近さを2次元のグラフ上に描くとグラフ上にプロットされた各項目間の距離から4つのクラスターへの大別が可能である（図2）。第1クラスターは、「スキル・能力」、「重要・必要・大切・役立つ」、「できない」、「生徒・子供・学生・大学生」の4項目、第2クラスターは「コミュニケーション力」、

「うまくできない・対応できない」、「保護者」の3項目、第3クラスターは「社会性・マナー」、「対人関係」、「社会」、「養成する・学ぶ」、「大学・学校」の5項目からなるグループであった。

表1　調査協力者の基礎情報

	男性	女性	人数(%)	
小学校教員	162	327	490	(48.9)
中学校教員	157	118	279	(27.8)
高等学校教員	155	77	233	(23.3)
初任期(前期)	139	144	284	(28.3)
初任期(後期)	65	79	145	(14.5)
中堅期	40	64	104	(10.4)
管理職期	230	235	469	(46.8)

表2　小中高の教育の社会性および対人関係能力の育成の必要性の度数とパーセンテージ

	小	中	高
	人数(%)		
必要あり	373(76.1)	213(76.3)	151(64.8)
どちらともいえない	102(20.8)	56(20.1)	67(28.8)
必要なし	15(3.1)	10(3.6)	15(6.4)
	490(100)	279(100)	233(100)

表3　調整済み残差の結果

	学校種		
	小	中	高
必要あり	1.8	1.2	−3.5
どちらともいえない	−1.2	−1.1	2.6
必要なし	−1.5	−.4	2.2

3）教員が望む社会性や対人関係能力の養成について

社会性や対人関係能力を教職課程で養成する場合、教員はどのような社会性や対人関係能力を身につけて欲しいと考えているのであろうか。無回答を除く771名（小学校355名、中学校218名、高校198名）を対象にテキストマイニングで分析を行った（図3)。回答者の約3%（30名）以上が回答しているキーワードを抽出した結果、小・中・高の教員全体において「相手・他人」「自分」「挨拶・礼儀」「気遣い・思いやり」が多く、これに加えて、小学校は「聴く」、中学校は「コミュニケーション力」、高校は「社会性・マナー」が上位であった。さらに、全体におけるキーワード同士の関係をみるためにコレスポンデンス分析を行った。各キーワード間の関係の近さを2次元のグラフ上に描くとグラフ上にプロットされた各項目間の距離から4つのクラスターへの大別が可能である(図4)。第1のクラスターは、「挨拶・礼儀」、「言葉遣い」、「会話力」の3項目、第2クラスターは「話し方・関わり方」、「組織・集団」、「生徒・子供」、「保護者」、「対応する力」、「コミュニケーション力」の6項目、第3クラスターは「素直さ」、「聴く力」、「先輩・目上の人」、「姿勢・態度」の4項目、

第４クラスターは、「協調性」、「伝える力」、「受け入れる力」、「相手・他人」、「気遣い・思いやり」、「立場」の６項目からなるグループである。

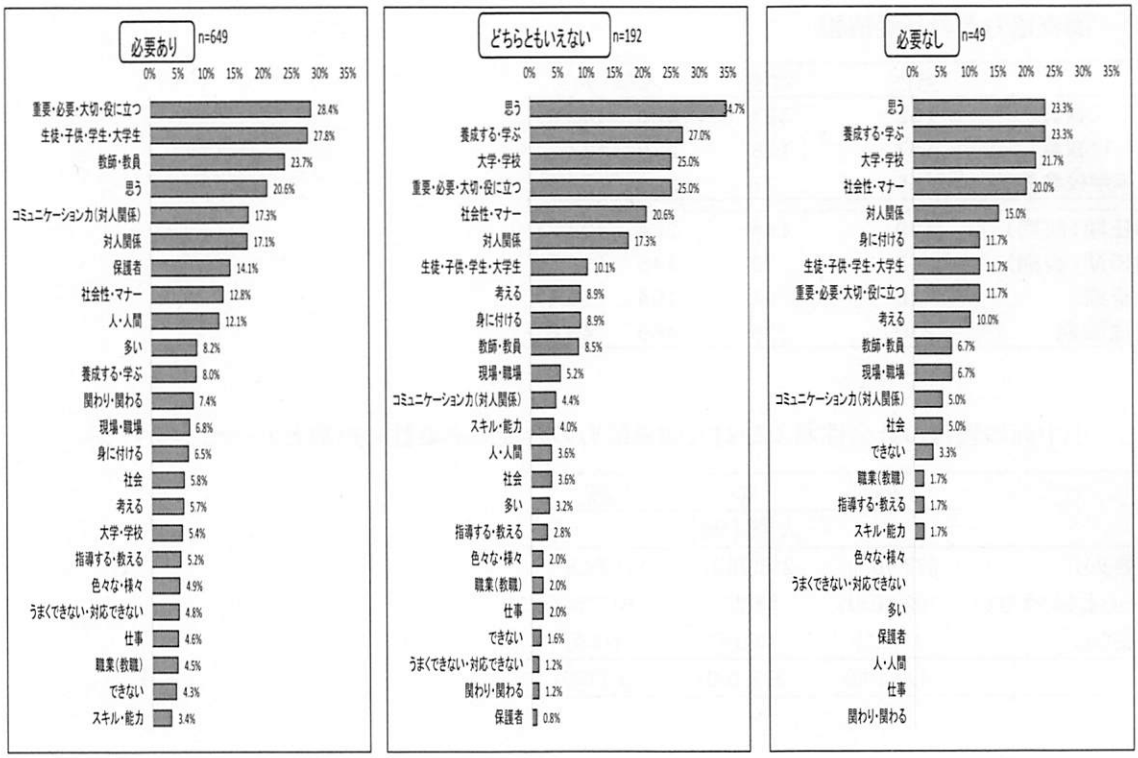

図１　教職課程における社会性や対人関係能力の育成の必要性に対する理由

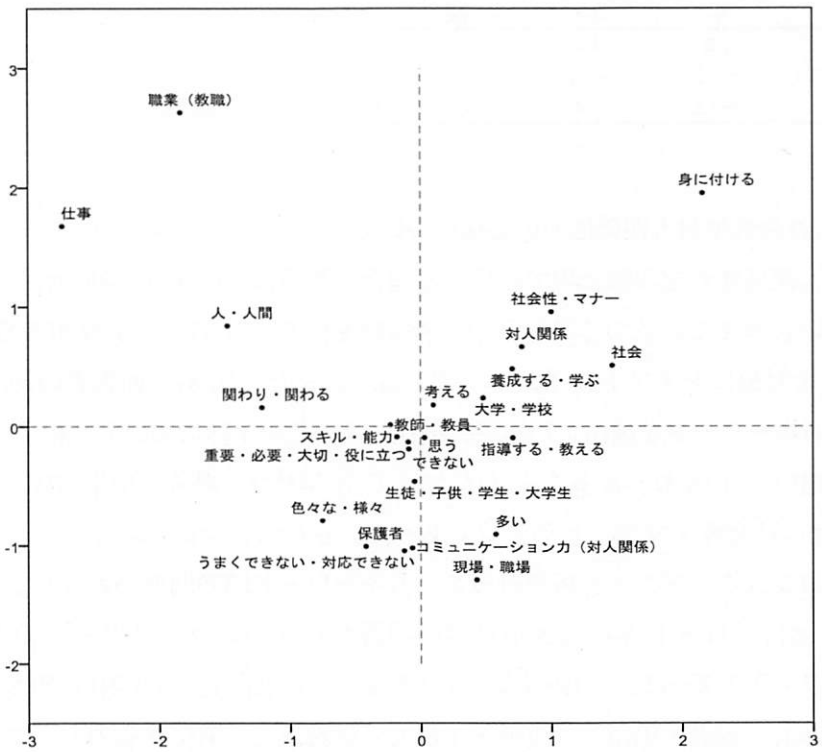

図２「必要あり」におけるクラスター分析の結果

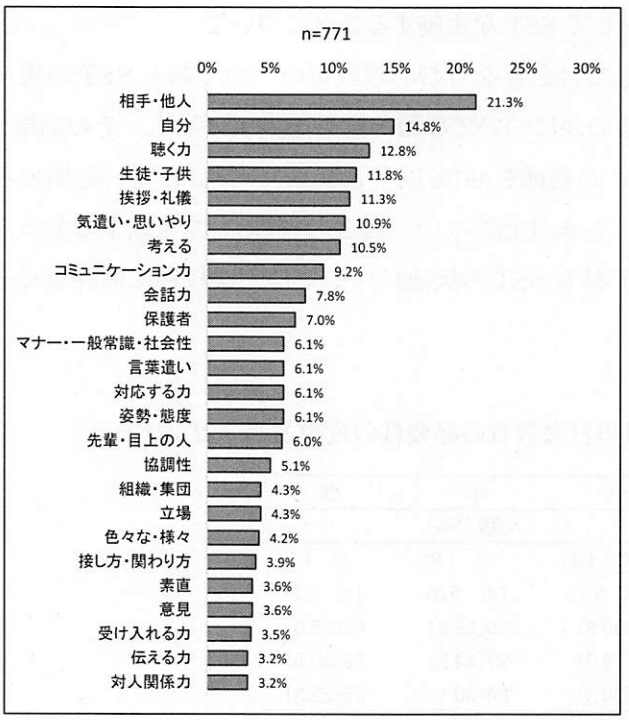

図３　小・中・高の教員が望む社会性や対人関係力の養成の内容

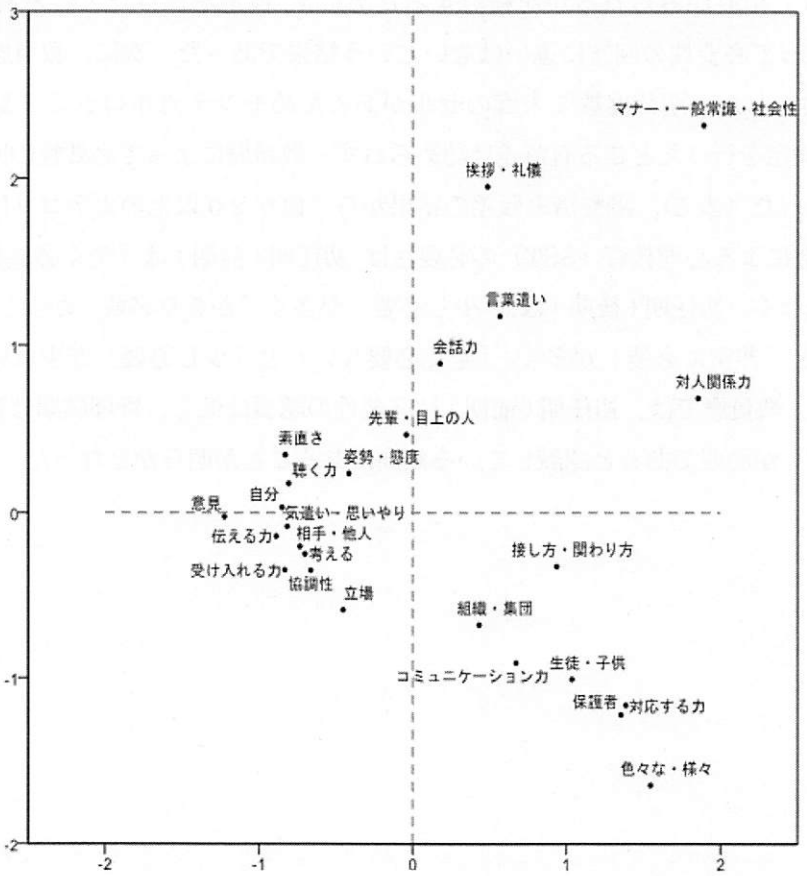

図４　小・中・高の教員が望む社会性や対人関係能力の養成の内容におけるクラスター分析の結果

4）教職課程の学生に対してSSTを実施することについて

教職課程の学生に対して社会性を育む心理教育の一つであるSSTの実施について、教師はどのような認識をもっているのかについて尋ねた結果を表4に示す。その結果、「かなり必要」「非常に必要」を合わせると、どの校種も60%以上となり、「少し必要」を加えると90%近くとなった。一方、「全く必要ない」「あまり必要ない」はどの校種も10%以下であったことから、教職課程の学生に対する心理教育であるSSTの実施については、学校種に関係なく必要であると考えていることがわかった。

表4　小・中・高の教員の社会教育の必要性の度数とパーセンテージ

	小	中	高
		人数(%)	
全く必要ない	7(1.4)	5(1.8)	3(1.3)
あまり必要ない	28(5.7)	14(5.0)	19(8.2)
少し必要	150(30.6)	79(28.3)	67(28.8)
かなり必要	176(35.9)	97(34.8)	78(33.5)
非常に必要	129(26.3)	84(30.1)	66(28.3)
	490(100)	279(100)	233(100)

学校種によって相違がみられるかを検討するためにχ^2検定を行ったところ有意差は認められず、学校種によって必要性の回答に違いはないという結果であった。次に、教員歴によって相違がみられるかを検討した。期待度数5未満のセルがあるためモンテカルロシミュレーションによるPearsonのχ^2検定を行ったところ有意差は認められず、教員歴によって必要性の回答に違いはないという結果であった（表5)。調整済み残差の結果から、値が2.0以上のカテゴリは特徴的であると判断し、教員年数による心理教育（SST）の必要性は、初任期（前期）は「全く必要ない」が多く「非常に必要」が少なく、初任期（後期）は、「少し必要」が多く「かなり必要」が少なく、管理職期は、「かなり必要」と「非常に必要」が多く、「全く必要ない」と「少し必要」が少ないことがわかった（表6)。つまり、教員歴では、初任期（前期）は必要性の認識は低く、管理職期は教職課程における心理教育（SST）が必要であると認識している傾向にあることが明らかとなった。

表5　教員歴によるSSTの必要性の度数とパーセンテージ

	教員歴カテゴリ　人数(%)				
	初任期(前期)	初任期(後期)	中堅期	管理職期	合計
全く必要ない	8(2.8)	4(2.8)	1(1.3)	2(1.3)	15(1.5)
あまり必要ない	21(7.4)	13(9.0)	2(8.2)	25(8.2)	61(6.1)
少し必要	90(31.7)	55(37.9)	39(28.8)	112 (28.8)	296(29.5)
かなり必要	99(34.9)	40(27.6)	33(33.5)	179(33.5)	351(35.0)
非常に必要	66(23.2)	33(22.8)	29(28.3)	151(28.3)	279(27.8)
	284 (100)	145 (100)	104 (100)	469 (100)	1002(100)

表6　調整済み残差の結果

	教員歴　(%)			
	初任期(前期)	初任期(後期)	中堅期	管理職期
全く必要ない	2.2(53.3)	1.4(26.7)	-.5(6.7)	-2.6(13.3)
あまり必要ない	1.1(34.4)	1.6(21.3)	-1.9(3.3)	-.9(41.0)
少し必要	.9(30.4))	2.4(18.6)	1.9(13.2)	-3.7(37.8)
かなり必要	-.1(28.2)	-2.0(11.4)	-.7(9.4)	2.0(51.0)
非常に必要	-2.0(23.7)	-1.5(11.8)	.0(10.4)	2.9(54.1)

5）学生に身につけて欲しいソーシャルスキルについて

学生に心理教育を行う場合、教員はどのようなソーシャルスキルを身に付けてほしいと考えているのだろうか。身につけて欲しいソーシャルスキルについて小・中・高の教員それぞれに尋ねた結果を表7に示す。最も多く挙げられていたのが「相手の気持ちを考えて接する・共感する」で小学校79.7%、中学校80.1%、高校81.0%であった。次いで、小・中は「挨拶する」「聴く」、高校は「聴く」「挨拶する」で、以下、「誤解や意見の食い違いなどのトラブルを上手に解決する」「ほめる・励ます・なぐさめる・心配する等のあたたかい言葉をかける」「きちんと謝る」のいずれかとなり、これら6つのスキルは校種に関係なく教師として身に付けて欲しい大切なソーシャルスキルであることがわかった。

表７　小・中・高の教員が教職課程の学生に身につけさせたいソーシャルスキル

	学校種			合計
	小	中	高	
①挨拶する	406	228	190	824
	77.20%	77.00%	73.60%	
②自己紹介する	179	102	82	363
	34.00%	34.50%	31.80%	
③聴く	386	214	196	796
	73.40%	72.30%	76.00%	
④質問する	275	142	129	546
	52.30%	48.00%	50.00%	
⑤仲間に入れてもらう	180	101	78	359
	34.20%	34.10%	30.20%	
⑥仲間を誘う	194	97	78	369
	36.90%	32.80%	30.20%	
⑦ ほめる・励ます・なぐさめる・心配する等のあたたかい言葉をかける	349	204	171	724
	66.30%	68.90%	66.30%	
⑧ 相手の気持ちを考えて接する・共感する	419	237	209	865
	79.70%	80.10%	81.00%	
⑨ 自分のしてほしいことなどを上手に、あるいはやさしく頼む	239	109	107	455
	45.40%	36.80%	41.50%	
⑩ 自分にとって嫌なことやできないことを上手に、あるいはきっぱりと断る	218	102	113	433
	41.40%	34.50%	43.80%	
⑪ 自分の意見や考えをはっきりと伝える	307	176	141	624
	58.40%	59.50%	54.70%	
⑫ 誤解や意見の食い違いなどのトラブルを上手に解決する	358	201	167	726
	68.10%	67.90%	64.70%	
⑬ イライラしたり、ドキドキしたりした気持ちをコントロールする	297	178	145	620
	56.50%	60.10%	56.20%	
⑭ きちんと謝る	349	202	163	714
	66.30%	68.20%	63.20%	
⑮ 異性と上手に関係を築く	125	54	67	246
	23.80%	18.20%	26.00%	
⑯ 年上の人と付き合う	294	170	130	594
	55.90%	57.40%	50.40%	
⑰ 自尊心	148	72	61	281
	28.10%	24.30%	23.60%	
⑱ 敬意をはらう	348	189	141	678
	66.20%	63.90%	54.70%	
⑲ 見通しを立てて実行する	287	174	142	603
	54.60%	58.80%	55.00%	
⑳ 電話のやりとりに関するマナー	267	153	110	530
	50.80%	51.70%	42.60%	

上段：件数，下段：%

４．考察

本研究の結果から、教職課程の学生に対する社会性や対人関係能力の育成については、多くの教師が必要であるとし、高校より小・中学校の教師の方が育成の必要性を重視していることがわかった。

これは、義務教育の方が道徳教育を基盤とした学校教育活動全体への関わりが求められ、学級活動や教育相談的な関わりなど、教師が児童生徒・保護者との関わりが密で、教職員間の連携が求められる環境にあることが関係しているのではないかと考えられた。つまり、実施されている県を除き、多くの高校では道徳が授業として教育課程に位置づけられていない。特に、小学校教員が必要と考える教師の資質能力として「保護者とのコミュニケーション力」「子どものしつけができる」「クラス集団をまとめる」が多くあげられていることが注目に値する。これについては、小学校の校長は「豊かな人間性や社会性」と「コミュニケーション能力」(山根・木多, 2013)、小学生の保護者は「児童とのコミュニケーション」を資質能力として重要視している。このことからも教職課程の学生に対して社会性や対人関係能力の育成を積極的に行っていくことが求められているといえよう。

教員が望む社会性や対人関係能力の養成については、具体的に「挨拶・礼儀」「気遣い・思いやり」が全校種で重要とされていた。小学校は「聴く」、中学校は「コミュニケーション力」、高校は「社会性・マナー」がさらに重要とされることが明らかとなった。そのコミュニケーションのスキル・能力は、全ての児童生徒が身に付ける必要がある。そのため、教職課程で学ぶ学生にも当然、重要になってくる。また、保護者とのコミュニケーション力も求められ、教職課程の養成に、社会性・マナー、対人関係のあり方を学ぶ時間をしっかりと確保することを教員が望んでいることも明らかとなった。

さらに、教職課程の学生に対してSSTにより社会性や対人関係能力の育成を望む教員が9割も存在した。「相手の気持ちを考えて接する・共感する」ことを重視し、「聴く」「挨拶する」「誤解や意見の食い違いなどのトラブルを上手に解決する」「ほめる・励ます・なぐさめる・心配する等のあたたかい言葉をかける」「きちんと謝る」といったスキルが、取得する免許の校種や教科に関係なく取得を求められていることが明らかとなった。

以上のことを踏まえ、今後はまず、大学の教職課程の教員が、教職課程の学生のソーシャルスキルに対して、どのような意識を持っているのか、また、すでに実際に養成を行っているのかを把握する必要があるだろう。そのなかで、見えてくる課題を具体的に取り上げながら、教職課程において、学生のソーシャルスキルの養成をどのように行っていけばよいのか、プログラムの開発や教職課程の学生のソーシャルスキルを養成するための体制作りについて理解を深めていくことが重要であると考える。そのうえで、教員養成にあたる教員がコミュニケーションや指導の技術を向上させていくことが強く求められる。同時に、地域社会や学校現場との連携の中で、どのように系統的・体系的に養成していくべきか広い視野から検討していく必要があるだろう。

引用文献

赤澤紀子・金子麦・佐々木啓子・中山泰一 (2014). 教職実践演習におけるICT教材作成演習の実践報告　情報教育シンポジウム2014論文集　173-177.

原田恵理子 (2012). 高校生に対するソーシャルスキルトレーニングのニーズ調査　東京経営短期大学紀要　**20**, 93-107.

五十嵐敦子・土橋久美子 (2015). 教職実践演習の授業展開に関する研究　白鴎大学教育学部論集　**9**, 117-138.

岩本親憲・矢萩恭子・高嶋景子（2011）．学習ポートフォリオとしての「履修ファイル」の開発　田園調布学園大学紀要　**6**，61－79.

菊永 俊郎・塚元 宏雄（2011）．実践的な力量形成を目ざした教員養成の充実：東京学芸大学及び立教大学における調査研究報告　鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 **21**, 303－308.

三村 真弓・山内 規嗣・中村 和世・大後戸 一樹・網本 貴一・木下 博義・佐藤 大志・間瀬 茂夫・枝川 一也・森田 愛子（2015）．各教科（校種別）の授業研究を通した教職・教科教育・教科内容の連携・教員協働のあり方に関する研究（3）:「教職実践演習」における取り組みを通して　広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト報告書 **13**, 45－64.

文部科学省（2011）．コミュニケーション能力を育むために～「話し合う・創る・表現する」ワークショップへの取組～　コミュニケーション教育推進会議審議経過報告　http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/__icsFiles/afieldfile/2011/08/30/1310607_2.pdf

佐藤広志・進藤正洋・田上由雄・成田信子（2008）．教師の資質能力に関する調査 - 小学校予備調査の結果分析 -　教育総合研究業書，**1**，63－93.

武田明典・村瀬公胤・八木雅之・宮木昇・嶋﨑政男（2013）．教職実践演習のカリキュラム開発ー初任者教員のニーズ調査ー　神田外語大学紀要　**25**，307－330.

田宮弘宣・下野浩二（2008）．教育学部以外の学生を対象とした「教職実践演習（仮称）」の試行：卒業後のアンケートから見えること　鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要　**18**，209－219.

友田靖雄・山内紀夫（2008）．学校インターンシップを活用した教職実践特別演習（試行）．教員養成学研究，**4**，35－43.

梅津徹郎（2011）．プレ「教職実践演習」の試行　北海道大学教職課程年報，1，35－41.

山根文男・古市裕一・木多功彦（2013）．理想の教師像についての調査研究（1）—大学生の考える理想の教師像ー　岡山大学教育実践総合センター紀要，**10**，63－70.

山根文男・木多功彦（2013）．理想の教師像についての調査研究（2）ー学校長等のインタビューからー　岡山大学教師教育開発センター紀要，**3**，90–97.

渡辺弥生・小林朋子（2009）10 代を育てるソーシャルスキル教育　北樹出版

謝辞

本研究にあたり、ご協力をいただきました小・中・高の先生方および東京情報大学内田治先生、平野綾子氏に深く感謝いたします。なお、本研究は平成 25 年度科学研究費助成事業学術研究助成基金助成金基盤研究（C）「教職課程の学生のためのソーシャルスキル教育の開発（課題研究番号：20623961，研究代表者：原田恵理子）の助成を受けて行われました。